

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

( 3 年計画の 2 年目)

## 1. 研究課題

オーラル・ヒストリー・アーカイヴスによる戦後日本映画史の再構築

Reconstructing Post WWII Japanese Film History through Oral History Archives

## 2. 研究代表者氏名

谷川建司

TANIKAWA Takeshi

## 3. 研究期間

2016 年 04 月 - 2019 年 03 月 (2 年度目)

## 4. 研究目的

日本の映画研究は美学・文学といった人文科学系研究者による映像のテキスト分析の手法に偏っており、映画を産業として、あるいは文化制度・文化政策・観客に対する効果といった社会科学的関心から研究対象として扱うアプローチが不足している。映画は芸術である以前に“興行”、即ち娯楽として発達してきたものであり、その作品がいかなる形で作られ、あるいはそれがどのような切り口で観客に提示され、いかに受け取られたのかという側面も同様に重要である。映画の作り手には監督や撮影監督以外にもスクリプター、殺陣師、美術等様々なスタッフがおり、更に配給・宣伝担当、劇場スタッフ等多くの関係者がいる。受容する主体としての映画ファンも重要である。本研究は様々な形・多様な経路で映画文化の創出に携わってきた人たちの経験を参照可能な形にアーカイヴス化する作業を通じて、映画文化発展の特質を社会的・経済的側面に着目して解明することが目的である。

Film Studies in Japan tend to focus on textual analyses performed by researchers from various fields of the humanities, such as aesthetics or literature. The approach to films from the point of view of social sciences, such as studies of film industry, cultural systems, cultural policies, or the effect on the audience, is currently lacking. Before film started being understood as art, it developed as “show business” or as entertainment, and how a film is made, how it was shown to the audience, and how that audience received it are matters of equally importance to the textual analysis of the film. Researchers from the humanities usually focus on the film director or cinematographer, but there are many other staff in film business whom the

researcher should focus on, such as scripters, sword fighting choreographers, production designers as well as distributors, publicity staff, theater staff, etc. The existence of the “movie fan,” as the subject at the receiving end of the film is also important. This research project aims to shed light on the characteristics of the development of film culture, focusing on its social and economic aspects, through archiving the experience of the people who participated in the creation of film culture in various forms.

## 5. 本年度の研究実施状況

本年度の研究実施状況 三年計画の第二年度である本年度は、まず年度初めの4月30日(日)に第一回研究会を開催、ゲストとして、映画プロデューサー・監督の岡本みね子氏(中みね子氏)をお招きして、主として岡本みね子氏の亡き夫である岡本喜八監督の諸作品を陰で支えた映画作りの実務面について話を伺った。また、付き添い役として、岡本喜八氏・みね子夫妻の娘で女優の岡本真実氏(前田真実氏)にも同席してもらい、補足説明をして頂いた。第二回研究会は6月10日(土)・11日(日)に行われ、初日には先ず大澤佳枝(フリーランス映画研究者)が映画『祇園祭』の資料調査報告を行った。その後、映画俳優として大映・東映という二つの会社で仕事をされた品川隆二氏をゲストに迎え京都における映画製作の現場の様々な事情を俳優という立場から語って頂いた。翌日はオーラル・ヒストリーの方法論に関して菊池暁(人文研)より民俗学の立場から報告していただき、併せて関連映像として『北白川こども風土記』を皆で鑑賞した。第三回研究会は7月13日(土)の一日のみ、場所もゲストの都合もあって東京の早稲田大学にて開催した。ゲストには芸能雑誌『平凡』『週刊平凡』で長年、映画業界を取材してきた高木清氏を招き、ファン雑誌と映画会社宣伝部の相互依存的な関係について学んだ。第四回研究会は9月9日(土)・10日(日)に開催され、初日には元・大映の経理担当から大映テレビ社長となった安倍道典氏を招き、井上雅雄(立教大学名誉教授)の進行の下、大映という映画会社の経営の在り方、そして倒産に至った経緯についての話を伺い、二日目には谷川建司が進行役を務めて、今後の研究会の在り方について議論を行った。その結果、これまでの(1)、ゲストを招いてのインタビュー、(2)、京都府出資で製作された映画『祇園祭』についての検討、(3)、オーラル・ヒストリーの在り方についての検討、という三つの柱に加えて、(4)、最終的なアウトプットとしての論考集の出版、という方向性を加えることとなり、次回以降の研究会では順次、論考の許となるメンバー個人の研究発表も行っていくこととなった。また、最終年度に映画『祇園祭』の上映及び同作品に関するシンポジウムを開催することを共通の認識として確認した。第五回研究会は11月19日(日)に開催された。先ず午前中は井上雅雄による発表(入院することとなったため木村智哉が代読)が行われ、午後には元・東宝、三船プロダクションの衣裳担当だった池田誠氏をゲストに迎えて、衣裳という観点で映画製作のシステムを学んだ。第六回研究会は2018年1月最終週もしくは2月第一週の土日二日間にて行われる予定である。初日には元・日活で美術を担当した千葉一彦氏をゲス

トに迎えてセット建設など、美術の観点で映画製作のシステムを学んだ。二日目には、谷川建司(早稲田大学)が自身の研究テーマについて発表を行った。

## 7. 本年度の研究実施内容

2017-04-30 第1回研究会 岡本みね子氏へのインタビューと質疑応答 司会 谷川建司 早稲田大学

発表者 岡本みね子 映画監督・製作

2017-06-10 第2回研究会(1日目) 映画『祇園祭』資料調査報告 発表者 大澤佳枝 フリーランス映画研究者

品川隆二氏へのインタビューと質疑応答 発表者 品川隆二 映画俳優

司会 谷川建司 早稲田大学

2017-06-11 第2回研究会(2日目) オーラル・ヒストリーの方法をめぐって 『北白川こども風土記』上映 発表者 菊池暁

2017-07-13 第3回研究会 高木清氏インタビューと質疑応答 司会 谷川建司他 早稲田大学

発表者 高木清 雑誌編集者

2017-09-09 第4回研究会(1日目) 安倍道典氏インタビューと質疑応答 発表者 安倍道典 大映テレビ(株)

司会 井上雅雄 立教大学

2017-09-10 第4回研究会(2日目) 今後の研究会の方針に関する話し合い 司会 谷川建司 早稲田大学

2017-11-19 第5回研究会 新映画会社の設立構想とその挫折:「日映」事件とその歴史的意味 発表者 井上雅雄 立教大学

池田誠氏へのインタビューおよび質疑応答 発表者 池田誠 元・東宝

司会 谷川建司 早稲田大学

2018-01-27 第6回研究会(1日目) 千葉一彦氏(映画美術監督) インタビューと質疑応答 発表者 千葉一彦 元・日活

司会 谷川建司 早稲田大学

2018-01-28 第 6 回研究会(2 日目) 時代劇低迷期以後のスターの活躍の場としての舞台  
の展開:東映歌舞伎・東宝歌舞伎をめぐって 発表者 谷川建司 早稲田大学

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	7 (2)	0	0	0	12 (11)	0	0	4 (4)
学内	1	3 (1)	0	1	2	16 (2)	0	0	0
国立大学	2	2	0	0	0	4	0	0	0
公立大学	2	2 (2)	0	0	2 (2)	13 (13)	0	0	6 (6)
私立大学	7	8 (3)	1	0	2 (1)	31 (10)	0	0	0
大学共同利用機関法人	2	2	0	0	2	12	0	0	9
独立行政法人等公的研究機関	1	1 (1)	0	0	0	0	0	0	0
民間機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0
外国機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	1	2 (2)	0	0	0	30 (15)	0	0	0
計	15	26 (11)	2 (2)	1	5 (2)	102 (46)	0	9 (0)	21 (12)

※( )内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	2
------	---

※( )内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

論文における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合

総論文数	2(1)
------	------

※( )内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合

掲載雑誌	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
立教経済学研究	1	新映画会社の設立構想とその挫折— 『日映』事件とその歴史的意味—	井上雅雄
京都メディア史研究年報	1	「新・日本資本主義発達史」としての戦 後映画史研究の可能性—谷川建司 『戦後映画の産業空間—資本・娯楽・ 興行』	花田史彦

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

### 13. 次年度の研究実施計画

次年度の研究実施計画 本年度同様、年間で 5 回程度の、一日または二日間の研究会を開催し、(1)、映画の様々な領域で仕事をしてきたゲストを招いての共同でインタビュー、(2)、映画『祇園祭』に関する調査報告、(3)、オーラル・ヒストリーの方法論についての報告、(4)、最終的な論考集にまとめるメンバー個人の研究テーマについての発表、を行っていく。また、2018年10月27日(土)・28日(日)の二日間、本研究会のまとめとしてのシンポジウム「人文研アカデミー2018・公開シンポジウム企画:「映画『祇園祭』と京都」(仮題)を開催する。既に初日の映画『祇園祭』上映会の会場の手配、二日目のシンポジウムの登壇者との交渉はほぼ終えており、今後は研究会内に実行委員会を組織して広報・集客などについて検討していく。最終的なアウトプットとしては、三年間に実施したゲストへのインタビュー・シンポジウムの報告を含めた報告書の作成、およびメンバーによる論考を集めた論考集の出版を予定している。

### 14. 次年度の経費

国内旅費	研究会参加費	開催回数 5回 国内出張旅費(延べ37人)	支出予定額 900,000円
謝金(講演謝金、研究協力謝金、その他の謝金)			支出予定額 300,000円
合計			1,200,000円

#### 15. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究成果公表計画および今後の展開等 初年度に引き続き、2017年度・2018年度についても各5名ずつ程度のインタビューを研究会ゲストとして招き、三年間トータルで15名程度のインタビューを行い、これをテープ起こししたものを成果として公開していく。その公開方法については検討中の段階であるが、書籍としての刊行、またはインターネット上での公開を想定している。さらに、三年間のまとめとして、研究会メンバーによる発表およびゲストを招いてのディスカッションなどを柱とする公開シンポジウムを第三年次である2018年度中に計画し、その記録を報告書(または上記の書籍の一部)として公表する。